

(発表タイトル)

寝たきりからの復活 ～自分のことを自分でしたい～

(都道府県名)

石川県

(施設名)

青山彩光苑ライフサポートセンター

(発表者職種名)

生活支援員

(発表者氏名)

金山 美也子

【施設の概要】

(2016年4月1日現在)

施設設立年月(西暦)	1989年 4月	職員の平均年齢	37歳		
施設入所支援 定員/現員	80名/ 81名				
日中活動(生活介護事業) 定員/現員	80名/ 108名				
その他の主たる日中活動 定員/現員 (具体的に: 短期入所)	7名/ 7名				
常勤職員数 非常勤職員数	72名 7名	常勤換算による 職員総数	75.7名		
入 所 者 の 状 況	障害支援区分の割合	区分1 0人	区分2 0人	区分3 2人	
		区分4 10人	区分5 22人	区分6 48人	
	障害・疾患別割合	脳性まひ 34%	脳血管障害 25%	脊髄損傷 7%	
		特定疾病(介護保険適用) 3%	特定疾患(難病) 3%		
		その他 30%	※「特定疾病」と「特定疾患」の両方に該当する症状(例: ALS、パーキンソン病など)をお持ちの入所者については、「特定疾病」と「特定疾患」の両方にそれぞれカウントしてください。		
	重複障害等の状況	視覚障害 1%	てんかん 1%	知的障害 17%	
		認知症状 0%	精神障害 0%	遷延性意識障害 10%	
	年齢構成	20歳未満 0%	20~39歳 7%		
		40~64歳 67%	65歳以上 26%		
	加 算 の 状 況	生活介護	人員配置体制加算(Ⅰ~Ⅲ)	あり・なし	Ⅰ○) Ⅱ[] Ⅲ[]
福祉専門職員配置等加算(Ⅰ~Ⅲ)			あり・なし	Ⅰ○) Ⅱ[] Ⅲ[]	
視覚・聴覚言語障害者支援体制加算			あり・なし		
リハビリテーション加算			あり・なし	対象者[107名]	
施設入所支援		夜間職員配置体制加算	あり・なし		
		重度障害者支援加算	Ⅰ	あり・なし	
			Ⅱ	あり・なし	体制整備[] 夜間個別支援[]
		夜間看護体制加算	あり・なし		
		視覚・聴覚言語障害者支援体制加算	あり・なし		
		地域移行加算	あり・なし		
		地域移行個別支援特別加算(Ⅰ・Ⅱ)	あり・なし	Ⅰ[] Ⅱ[]	
		栄養マネジメント加算	あり・なし		
		経口移行加算	あり・なし	対象者[0名]	
経口維持加算	あり・なし	対象者[6名]			
療養食加算	あり・なし	対象者[51名]			
特徴的な事業や 重点事業等					

寝たきりからの復活

～自分のことを自分でしたい～

都道府県 : 石川県 会員施設名 : 青山彩光苑ライフサポートセンター
発表者氏名 : 金山 美也子

I. 実践の目的・ねらい

家庭環境に問題があり、在宅で十分な介護が受けられず褥瘡が出来、また、食事も満足に与えられず栄養状態の悪化による意識障害が確認されたA氏が、施設を利用することになった。施設入所をきっかけに、寝たきりからできるだけ、自分のことを自分で行う生活に戻れるように取り組んだことを報告する。

II. 実践方法・取り組んだこと

対象者は、60歳代の男性。障害名は「分娩麻痺、右上下肢不随、言語障害」で、障害福祉サービス受給者証の障害支援区分6である。退職後、畑仕事をしながら在宅生活を送っていたが、トイレで転倒し寝たきり状態となった。妻や娘は介護拒否をし、主に介護をしていた実母は認知症が進み介護できる状態ではなくなった。そのため、褥瘡が悪化する。食事はおにぎりのみであったため栄養不足となり、意識障害が確認され入院。退院後、施設入所となった。入所当初は、ベッド上で過ごしADLのほとんどは全介助であったが、入所に至る経緯からADLの回復を予測し以下の支援に取り組んだ。

- ①食事動作支援：道具や食器配置などを工夫すれば自力摂取が可能になると考えた。
- ②排泄支援：曖昧であるが尿意・便意はあった。褥瘡が完治し車椅子上の時間が増えたこともあり、日中はオムツを外しトイレでの排泄を試みた。
- ③活動支援：車椅子での活動は可能と判断。活動範囲を広げ、意欲の向上を図るよう様々なプログラムへの声掛けを行った。

III. 実践の結果

①食事動作支援：オーバーテーブル・スプーン・フォークを準備し、食器の配置を考慮すると、毎食の声掛けと見守りで自力摂取可能となった。支援2か月後には、全粥から米飯に変更した。

②排泄支援：訴え時にトイレに座る形を取ったが、すでに排泄後であったり、座っても排泄出来ない事が続いた。そこで車椅子に座ったまま尿器を使った排泄を試みた。最初は介助で尿器を使用していたが、「自分です」との本人の意思があり任す事にした。毎日衣類の交換はあるが、尿捨て・尿器の洗浄も自ら行っている。排便に関しても朝食後にトイレに座る事を徹底したところ、座薬使用がほとんどなく排泄できている。

③活動支援：活動参加を促す声掛けをしても意欲がなく拒否されることが多かったが、車椅子で自由に行動するようになると他者との交流が増え、意欲的にプログラムに参加するようになった。

IV. 分析・考察

介護のプロとして、障害となった原因は何か、どの程度まで回復が望めるのかを早期に見極め支援することは、生活の質が変わってくることに繋がるので大事である。自分でできることが増えたことで、充実した生活を送る事が出来ていると感じる。

(発表タイトル)

国体に参加したい！ ～利用者の思いに応える支援～

(都道府県名)

石川県

(施設名)

青山彩光苑ライフサポートセンター

(発表者職種名)

生活支援員

(発表者氏名)

雲田 喜弘

【施設の概要】

(2016年4月1日現在)

施設設立年月(西暦)	1989年 4月	職員の平均年齢	37歳		
施設入所支援 定員/現員	80名/ 81名				
日中活動(生活介護事業) 定員/現員	80名/ 108名				
その他の主たる日中活動 定員/現員 (具体的に: 短期入所)	7名/ 7名				
常勤職員数 非常勤職員数	72名 7名	常勤換算による 職員総数	75.7名		
入 所 者 の 状 況	障害支援区分の割合	区分1 0人	区分2 0人	区分3 2人	
		区分4 10人	区分5 22人	区分6 48人	
	障害・疾患別割合	脳性まひ 34%	脳血管障害 25%	脊髄損傷 7%	
		特定疾病(介護保険適用) 3%	特定疾患(難病) 3%		
		その他 30%	※「特定疾病」と「特定疾患」の両方に該当する症状(例:ALS、パーキンソン病など)をお持ちの入所者については、「特定疾病」と「特定疾患」の両方にそれぞれカウントしてください。		
	重複障害等の状況	視覚障害 1%	てんかん 1%	知的障害 17%	
		認知症状 0%	精神障害 0%	遷延性意識障害 10%	
	年齢構成	20歳未満 0%	20~39歳 7%		
		40~64歳 67%	65歳以上 26%		
	加 算 の 状 況	生活介護	人員配置体制加算(Ⅰ~Ⅲ)	あり・なし	Ⅰ○) Ⅱ[] Ⅲ[]
福祉専門職員配置等加算(Ⅰ~Ⅲ)			あり・なし	Ⅰ○) Ⅱ[] Ⅲ[]	
視覚・聴覚言語障害者支援体制加算			あり・なし		
リハビリテーション加算			あり・なし	対象者[107名]	
施設入所支援		夜間職員配置体制加算	あり・なし		
		重度障害者支援加算	Ⅰ	あり・なし	
			Ⅱ	あり・なし	体制整備[] 夜間個別支援[]
		夜間看護体制加算	あり・なし		
		視覚・聴覚言語障害者支援体制加算	あり・なし		
		地域移行加算	あり・なし		
		地域移行個別支援特別加算(Ⅰ・Ⅱ)	あり・なし	Ⅰ[] Ⅱ[]	
		栄養マネジメント加算	あり・なし		
		経口移行加算	あり・なし	対象者[0名]	
経口維持加算	あり・なし	対象者[6名]			
療養食加算	あり・なし	対象者[51名]			
特徴的な事業や 重点事業等					

国体に参加したい！

～利用者の思いに応える支援～

都道府県：石川県

会員施設名：青山彩光苑ライフサポートセンター

発表者氏名：雲田 喜弘

I. 実践の目的・ねらい

日常生活において様々な介助を受け、長期の外泊は困難な方であると考えられていたA氏が、平成27年度全国障害者スポーツ大会の陸上競技の石川県代表として選出されたことによって、「是非、国体に参加したい」と希望された。そこで、大会期間中に想定される課題を挙げ、対応の仕方を他職種と協力して検討。A氏の思いに応えるよう国体参加に向けた支援に取り組んだことを報告する。

II. 実践方法・取り組んだこと

A氏は60歳代の男性。頸髄損傷による体幹（1級）及び四肢機能全廃。障害支援区分4。車椅子自走可。食事自立。排泄（バルーンカテーテル留置）、移乗、更衣等は介助を要する。参加種目：50m走・ビーンバック投げ（区分10）。

① 環境面の課題

A：宿泊先から会場までの移動手手段の課題。選手団は観光バスを利用して移動するが、入り口の階段が高く困難が予想された。階段昇降の評価では20cm以上の段差は足をあげることができなかつた。県に介護タクシーを依頼したが、手配が難しかった。バスの段差を小さくするため、階段を増やし介助者3人で前後から支えながら昇降を行なった。座席は一番前の席を配慮してもらう。

B：宿泊先の設備面の課題。宿泊先が決定した段階で部屋の間取りを確認すると部屋の入口がA氏の車椅子の幅より狭いことが判明。PT指導のもと介助歩行で部屋に入る練習を行なった。ふらつきなども無いため現地でもその方法を採用した。また、トイレ・シャワーは狭いため利用困難。体重が約100kgの肥満であり、皮膚の密着によるただれがあるため、洗浄と軟膏塗布の必要があり、シャワーが出来る場所の確保が必要であった。いくつかの候補の中から、競技会場のシャワー室の利用承諾をとり、利用することとした。トイレは、排便のみの使用。ホテル内に多目的トイレが1つしかなく、競技の合間をみて競技会場のトイレを利用することにした。

②生活リズムの課題：普段はベッド上の臥床時間が多く、現地までの長距離移動や、大会中の長い車椅子座位時間に耐えることができるのか不安があった。車椅子乗車の練習として、朝5時から17時間、車椅子で過ごす体験をした。起床時間は問題なかったが、連続は難しく、休む姿勢を提案しながら毎日励ましを行い、1週間後可能となった。

III. 実践の結果

施設環境の問題は、A：県選手団役員の人的介助を得られたことでバスの乗降も問題なく行えた。B：事前に情報収集を行いA氏の利用可能な施設を見つけた事、また各関係機関と連絡を密に行い、施設の使用許可を得ることで解決でき、大きな問題なく5泊6日を過ごす事が出来た。またA氏自身の生活リズムを整える努力を後押しし参加への意欲を持続できたことで参加種目2種で金メダルを取ることができた。

IV. 分析・考察

今回国体に参加するにあたって、A氏の参加意欲が高く、訓練に積極的に取り組む姿勢を後押ししたことや、出てきた課題に対し、職員間・外部機関との協力がスムーズに行えたことが、良い結果につながったと感じた。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

(発表タイトル)

行きたいところに行く為に ～外出、旅行支援の取り組み～

(都道府県名)

栃木県

(施設名)

光輝舎

(発表者職種名)

支援員

(発表者氏名)

岡本 智

サービス管理責任者

平井 司

【施設の概要】

(2016年4月1日現在)

施設設立年月(西暦)	2001年 4月	職員の平均年齢	35.9歳		
施設入所支援 定員/現員			50名/ 52名		
日中活動(生活介護事業) 定員/現員			70名/ 72名		
その他の主たる日中活動 定員/現員 (具体的に:)			名/ 名		
常勤職員数 非常勤職員数	32名 10名	常勤換算による 職員総数	40.8名		
入 所 者 の 状 況	障害支援区分の割合	区分1 0人	区分2 0人	区分3 0人	
		区分4 0人	区分5 6人	区分6 46人	
	障害・疾患別割合	脳性まひ 36.5%	脳血管障害 27%	脊髄損傷 5.8%	
		特定疾病(介護保険適用) %	特定疾患(難病) 5.8%		
	重複障害等の状況	その他 25%	※「特定疾病」と「特定疾患」の両方に該当する症状(例:ALS、パーキンソン病など)をお持ちの入所者については、「特定疾病」と「特定疾患」の両方にそれぞれカウントしてください。		
		視聴覚障害 5.8%	てんかん 15.4%	知的障害 30.8%	
	年齢構成	認知症状 13.5%	精神障害 3.8%	遷延性意識障害 1.9%	
		20歳未満 0%	20~39歳 13.5%		
	加 算 の 状 況	生活介護	人員配置体制加算(I~III)	(あり)・なし	I [] II [] III [O]
			福祉専門職員配置等加算(I~III)	(あり)・なし	I [O] II [] III []
視覚・聴覚言語障害者支援体制加算			あり(なし)		
リハビリテーション加算			(あり)・なし	対象者 [17名]	
施設入所支援		夜間職員配置体制加算	(あり)・なし		
		重度障害者支援加算	I	(あり)・なし	
			II	あり(なし)	体制整備 [] 夜間個別支援 []
		夜間看護体制加算	あり(なし)		
		視覚・聴覚言語障害者支援体制加算	あり(なし)		
		地域移行加算	あり(なし)		
	地域移行個別支援特別加算(I・II)	あり(なし)	I [] II []		
	栄養マネジメント加算	あり(なし)			
経口移行加算	あり(なし)	対象者 [名]			
経口維持加算	(あり)・なし	対象者 [18名]			
療養食加算	(あり)・なし	対象者 [8名]			
特徴的な事業や重点事業等	<p>法人理念の障害の種別や程度にこだわらずに、共に生きがいとゆとりをめざし、3障害を対象とした受け入れをしている。</p> <p>法人内においては、高齢者分野、保育分野等の事業も運営している。</p> <p>短期入所(6名)、日中一時支援(3名)</p> <p>指定特定相談支援(相談支援センター併設)、委託相談支援(指定特定・障害児)</p> <p>委託相談支援については、芳賀郡障害児者相談支援センターに芳賀郡内(4町)の事業所から職員を外向させて実施している。</p>				

行きたいところに行く為に ～外出、旅行支援の取り組み～

都道府県：栃木県

会員施設名：光輝舎

発表者氏名：岡本 智 平井 司

I. 実践の目的・ねらい

当施設では、利用者の様々なニーズを取り入れ、施設の特徴の1つとして全利用者を対象に月2回の外出、年1回の旅行を実施している。行きたい場所や欲しい物、やりたいこと等、利用者自らが選択し目的を持って参加することや、外出先で味わう新たな感動や楽しみ等、様々な体験を通して、生活意欲の向上を目的としている。又、障害者自身が外出することで、地域の障害者に対する理解や地域全体の支援力の向上といった、共生社会の実現を目的の一つとしている。

II. 実践方法・取り組んだこと

利用者からアンケートを取り、外出先の下見や情報収集を入念に行い、障害があっても安全に安心して外出が楽しめるよう、事前に想定される様々なリスクを考慮し、外出先を選定している。また、外出先はバリアフリーの場所に限定せず、利用者が行ける所ではなく行きたい所に行く為に、職員自ら方法や装具、備品を考え作成し、工夫して支援を行うことや、外出先のスタッフと事前に打ち合わせをし理解を得ることで、ニーズに合わせた場所への外出、旅行に繋がっている。主な外出先は、スーパーマーケットや衣料品店での買い物、ラーメン屋、居酒屋等での外食、カフェでのティータイム等、また、個々のニーズに対応すべく、メガネ屋、美容室等、少数派の意見も積極的に取り入れ、選択外出として出かけている。旅行では、北海道や沖縄、東京ディズニーランド等国内の他、韓国やシンガポール、グアム等の海外へも出かけている。

III. 実践の結果

外出や旅行を通し、利用者は目的を達成すると共に自己実現や様々な体験をすることで自己覚知に繋がっている。「次は、〇〇に行きたい。」「〇〇がしたい。」と、次への目標や期待を得ることで、充実した生活を送ることが出来ている。また、職員においても、利用者の普段とは違った一面や支援に繋がる発見ができ、施設内とは違った環境で模索や工夫をして支援することで、支援の幅が広がり、援助技術の向上に繋がっている。又、外出の準備や企画を通して自己の課題の発見、達成感や成功体験をすることで、モチベーションの向上に繋がっている。

地域社会との関係では、企画の段階で打ち合わせを密に行うことで関係性の構築に繋がりが、障害者用のトイレや駐車スペースの増設等、協力や理解を得ることが出来ている。

IV. 分析・考察

外出や旅行を楽しみにしている方が多い反面、疾病や体力面で思うように参加が出来ない方も少数ながらいる。特に、利用者の高齢化や障害の重度化が進んでおり、利用者の思いと職員の思い、医療面とで折り合いを付けることが必要になってきている。利用者の変化する状態、ニーズに合わせた支援方法や行き先の検討、制度や社会環境変化への柔軟な対応等、日常から余暇の部分まで、より質の高いサービスを提供できるよう体制を整えていきたい。

(発表タイトル)

「家へ帰りたいよ…」～医療行為等がある利用者の（自宅）外出支援～

(都道府県名)

石川県

(施設名)

青山彩光苑水ライフサポートセンター

(発表者職種名)

看護師

(発表者氏名)

坂口 奈保美

【施設の概要】

(2016年4月1日現在)

施設設立年月（西暦）	2004年 4月	職員の平均年齢	40歳		
施設入所支援 定員／現員			50名／ 51名		
日中活動（生活介護事業）定員／現員			60名／ 76名		
その他の主たる日中活動 定員／現員 （具体的に：）			名／ 名		
常勤職員数 非常勤職員数	34名 6名	常勤換算による 職員総数	36.1名		
入 所 者 の 状 況	障害支援区分の割合	区分1 0人	区分2 0人	区分3 6人	
		区分4 11人	区分5 14人	区分6 20人	
	障害・疾患別割合	脳性まひ 33%	脳血管障害 31%	脊髄損傷 10%	
		特定疾病（介護保険適用） %	特定疾患（難病） %		
		その他 13%	※「特定疾病」と「特定疾患」の両方に該当する症状（例：ALS、パーキンソン病など）をお持ちの入所者については、「特定疾病」と「特定疾患」の両方にそれぞれカウントしてください。		
	重複障害等の状況	視聴覚障害 9%	てんかん 23%	知的障害 40%	
		認知症状 12%	精神障害 16%	遷延性意識障害 0%	
	年齢構成	20歳未満 0%	20～39歳 10%		
		40～64歳 49%	65歳以上 41%		
	加 算 の 状 況	生活介護	人員配置体制加算（Ⅰ～Ⅲ）	あり・なし	Ⅰ○）Ⅱ〔〕Ⅲ〔〕
福祉専門職員配置等加算（Ⅰ～Ⅲ）			あり・なし	Ⅰ〔〕Ⅱ〔〕Ⅲ〔〕	
視覚・聴覚言語障害者支援体制加算			あり・なし		
リハビリテーション加算			あり・なし	対象者〔 43名〕	
施設入所支援		夜間職員配置体制加算	あり・なし		
		重度障害者支援加算	Ⅰ	あり・なし	
			Ⅱ	あり・なし	体制整備〔〕夜間個別支援〔〕
		夜間看護体制加算	あり・なし		
		視覚・聴覚言語障害者支援体制加算	あり・なし		
		地域移行加算	あり・なし		
		地域移行個別支援特別加算（Ⅰ・Ⅱ）	あり・なし	Ⅰ〔〕Ⅱ〔〕	
		栄養マネジメント加算	あり・なし		
		経口移行加算	あり・なし	対象者〔 0名〕	
経口維持加算	あり・なし	対象者〔 3名〕			
療養食加算	あり・なし	対象者〔 23名〕			
特徴的な事業や 重点事業等					

家へ帰りたいよ…

～医療行為等がある利用者の（自宅）外出支援～

都道府県：石川県 会員施設名：青山彩光苑穴水ライフサポートセンター

発表者氏名：坂口 奈保美

I. 実践の目的・ねらい

施設に入所中の利用者は、心身の障害に加えて、日常的な医療的行為や複雑な介護の増加、家族の高齢化等の事情が加わると、自宅への外出が困難になる。当施設でもそうした現状の中、「もう一度うちへ帰りたいよ～」という利用者の一言から、この思いを叶えられないかと考え、支援として実施した。

II. 実践方法・取り組んだこと

対象者は、日常的に医療的行為や複雑な介護が増えた時期から、外出・外泊が減ったと思われる4名の利用者。

実践方法は①対象者本人と家族に自宅外出についての思いを確認し、日時調整。②（自宅）外出に関するケアプランを作成。③看護師2名で利用者を自宅へ送迎。必要な介助や医療的行為をした後、1時間程家族と過ごしてもらい、その様子を記録。

III. 実践の結果

対象者は、カレンダーに印を付けて外出支援日を心待ちにしている様子だった。

A氏：母は認知症があり、「会っても自分のことわからないだろう」と言っていたが、手を握ると「〇〇か？」とにぎり返し、涙ぐんで抱き付き喜ぶ姿がみられた。「母が死ぬ前に、もう一度会えたので嬉しい」と話される。A氏は普段から些細なことで職員に怒鳴ったり舌打ちをすることがよくあったが、この外出支援の頃から職員の日常的な介助に対して「ありがとう」と言う言葉が聞かれ表情が軟らかくなり笑顔も増えた。

B氏：声を上げて自分の座りたい場所を指示し、機嫌良かった。両親も「胃痙になってからは家に連れて来れなかった」「看護師さんが一緒に来てくれて安心だし、良かった」と喜んでいて。普段から大声で不機嫌に叫んで泣き、自分の欲求を伝えようとする方だが、自宅外出後の週は機嫌良く、家での話をするとうれしそうに笑顔を見せていた。

C氏：父親は「オシッコの管があるし、俺も腰が痛くて抱っこ出来なくなったから家に連れて来れなかった。来てもらえてよかった」、母親も「もう思い残す事はない」と話す。本人は「まだ居たいよ」と名残惜しそうだった。自宅外出後は「家は良かったよ」「また行きたい。今度はいつ？」と話していた。

D氏：娘をいつも気にかけている高齢の母は「この子の病気が悪くなるのを心配していても会いに行けないし、こうして連れて来てもらって喜ぶ顔を見たらホッとした」と涙声で話す。終始側にいて口元の動きを読み取り、コミュニケーションを取っていた。病状の進行に伴い、自宅から遠い施設へ転居する直前だったため、本人も家族も「家に連れて来られて良かった」と喜ばれた。

IV. 分析・考察

自宅に行きたい思いがあっても、医療的行為等を前にして、外出を諦めていることが多々ある。職員もそこに気付かず、ニーズが見過ごされてきたことは反省すべき点だと感じた。家族のできない部分を支援することで、自宅への外出が実現し、家族との団らんの時をつくることができた。今回支援を行った全ての利用者・家族の反応は良かったと感じた。外出支援後の利用者の様子を見ても、長い施設生活を送る上で、今後の生活の励みやうらおいに繋がると思われる。

(発表タイトル)

地域移行への取り組み ～グループホーム「きらら」を機に～

(都道府県名)

千葉県

(施設名)

永幸苑

(発表者職種名)

主任援助士

副主任援助士

(発表者氏名)

鈴木 康司

内田 淳也

【施設の概要】

(2016年4月1日現在)

施設設立年月(西暦)	1991年 3月	職員の平均年齢	35.6 歳		
施設入所支援 定員/現員			80名/ 84名		
日中活動(生活介護事業) 定員/現員			110名/ 140名		
その他の主たる日中活動 定員/現員 (具体的に:)			0名/ 0名		
常勤職員数 非常勤職員数	61 名 18 名	常勤換算による 職員総数	71.2 名		
入 所 者 の 状 況	障害支援区分の割合	区分1 0人	区分2 0人	区分3 0人	
		区分4 3人	区分5 9人	区分6 72人	
	障害・疾患別割合	脳性まひ 27.4%	脳血管障害 23.8%	脊髄損傷 2.4%	
		特定疾病(介護保険適用) 34.5%	特定疾患(難病) 9.5%		
	重複障害等の状況	その他 46.4%	※「特定疾病」と「特定疾患」の両方に該当する症状(例: ALS、パーキンソン病など)をお持ちの入所者については、「特定疾病」と「特定疾患」の両方にそれぞれカウントしてください。		
		視聴覚障害 4.7%	てんかん 67.9%	知的障害 47.6%	
	年齢構成	認知症状 0%	精神障害 0%	遷延性意識障害 0%	
		20歳未満 0%	20~39歳 16.7%		
		40~64歳 61.8%	65歳以上 21.5%		
	加 算 の 状 況	生活介護	人員配置体制加算(Ⅰ~Ⅲ)	(あり・なし)	Ⅰ[○] Ⅱ[] Ⅲ[]
福祉専門職員配置等加算(Ⅰ~Ⅲ)			(あり・なし)	Ⅰ[○] Ⅱ[] Ⅲ[]	
視覚・聴覚言語障害者支援体制加算			あり・(なし)		
リハビリテーション加算			(あり・なし)	対象者[80名]	
施設入所支援		夜間職員配置体制加算	(あり・なし)		
		重度障害者支援加算	Ⅰ	(あり・なし)	
			Ⅱ	あり・なし	体制整備[] 夜間個別支援[]
		夜間看護体制加算	あり・(なし)		
		視覚・聴覚言語障害者支援体制加算	あり・(なし)		
		地域移行加算	あり・(なし)		
		地域移行個別支援特別加算(Ⅰ・Ⅱ)	あり・(なし)	Ⅰ[] Ⅱ[]	
		栄養マネジメント加算	(あり・なし)		
経口移行加算	(あり・なし)	対象者[1名]			
経口維持加算	あり・(なし)	対象者[名]			
療養食加算	(あり・なし)	対象者[24名]			
特徴的な事業や 重点事業等	ISO9001認定事業所				

地域移行への取り組み

～グループホーム「きらら」を機に～

都道府県：千葉県

会員施設名：永幸苑

発表者氏名：鈴木 康司 内田 淳也

I. 実践の目的・ねらい

平成19年4月から施設を利用していたAさん、グループホームで生活したいという目標があった。平成28年4月当法人にて新築は県内初となる身体障害者を対象としたグループホーム「きらら」が新規開設された。本人の目標を達成するために障害者支援施設永幸苑からグループホーム「きらら」に移行するために支援していく。

施設での生活では、手間のかかることは自分で出来ることでも職員に頼んでしまうことや、気の合わない利用者へは興奮すると手を挙げてしまうことなどがあった。グループホームに移行するにあたり、協調性や自主性を身に付けてもらえるような支援の取り組みを行ってきた。

II. 実践方法・取り組んだこと

ご自身で出来ることはご自身で行ってもらおうという点と金銭管理、人間関係の構築、またご自身で問題を解決していくための支援について取り組む。

1. まずは自分でできることを行う

単下肢装具を履くことやご両親に購入を依頼する品をメモに取ること、時間薬を持ってきてもらうことなど、今まで職員が行っていたことをまずは自分で行い、職員はアドバイスをするという考え方を身に付ける支援をした。

2. 金銭の管理

無年金であった為、生活費全般はご両親が負担をされていた。必要品もご両親が購入されるという生活であったが、生活保護受給についてご両親は消極的だった。

グループホーム移行をきっかけに生活保護を受給され、ご自身での金銭管理についての支援をした。

3. 人間関係の構築

普段から数名の限られた利用者としか話すことはなかったが、気が合わなかったり、初対面の利用者であっても挨拶程度は出来るような人間関係の築き方についてや、気に障ることをされると手を挙げてしまうことがあるが、そのような場面でも興奮せずに対処できるような感情のコントロールをする支援をした。

III. 実践の結果

それぞれの課題を克服し、現在はグループホームでリーダー的存在として生活を送っている。次の課題としては、就労を視野に入れた生活や地域での単身生活、恋愛や結婚についての意欲が出てきている。

IV. 分析・考察

利用者の可能性を引き出すことは容易なことではない。本人の意欲はもちろん必要だが、それだけではなく、ご家族や職員の手も不可欠であるということをしかりと認識し、熱意を持って取り組まなければ可能性は広がらない。

利用者が夢や希望を抱き、それを実現させるためには沢山のエネルギーが必要になる。目指すべき姿は様々であるが、まずは一つを達成することで次の目標が見つかり、次は更に大きな目標へと繋がっていく。最初は小さな目標でも達成し続けることで、本人だけでなく家族や職員も喜びを共有できる一例となったと考える。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。